

アドルフ・ロース ビーダーマイヤー 『Ins Leere Gesprochen』
『装飾と罪悪』 市民文化 近代精神

1. はじめに

本研究では、19 世紀末から 20 世紀初頭に活躍したウィーンの建築家アドルフ・ロース(Adolf Loos, 1870-1933)の言説を、19 世紀ウィーン市民文化の動向を通して分析を行う。これまでのロースに関する研究の射程は、19 世紀末ウィーン、そして建築や芸術文化の範疇に留まっていたきらいがある。特に、ロースが自らの活動した世紀末ウィーンの状態と比較し「半世紀前は…」という発言を度々行っているにも拘らず、19 世紀前半の動向は軽視されてきた。さらにロースはそのとき市民生活に向けて多くの発言を残す。その「半世紀前は」が、ビーダーマイヤー期(Biedermeier)を指すことは既に指摘¹されている。そこで、19 世紀前半との関連を持つロースの姿と、19 世紀末ウィーンにおける彼の姿とを繋ぎ合わすべく、19 世紀を通じた連続的なロースの認識を、彼の言説を中心に整理する。そして歴史的事実である一連の市民文化の動向と照らし合わせ、彼の理論形成の軸を追う。これらを土台に、晩年のパリでの活動²を踏まえ、ロースの近代精神に関して考察する。

2. 19 世紀ウィーン市民文化の動向

ロースが活動を始めた 19 世紀末へ至る過程、19 世紀ウィーンにおける市民文化の動向を整理する。

19 世紀前半のビーダーマイヤー期、市民はウィーン体制³による政治的制約を受けた。彼らはその中で自らの生活の快適さを見直し、個人主義と呼べる近代市民文化を完全な私的空間で形成した。1848 年の三月革命⁴を機に、私的空間において蓄積された市民文化の活力が解放され、経済・社会的に急成長を遂げた新興市民階級が公的な地位を確実なものとした。その後、急激な人口増加や時代遅れな中世以来の市壁が問題視され、1857 年、都市拡張計画⁵が始まる。そこで施されたリングシュトラッセ⁶には、新興市民により壮麗な建築が建てられ、彼らの市民文化は自身の手による都市空間において活性化した。さらに 1873 年、ウィーン万国博覧会の開催により、彼らが先導した技術発展と都市整備を全世界に知らしめた。しかし、万博直後の株価大暴落やリング劇場の火災(1881 年)により新興市民階級の危機管理の欠如という弱点が露呈し、それまで前進し続けた市民文化は世紀末にかけて徐々に衰退した。

3. 理論形成の始点としての 19 世紀前半

ロースは、19 世紀前半に対し賞賛を与える。このことは、19 世紀後半に対し批判的態度をとる、彼の 19 世紀を通底した認識を把握する上で大きな意味を持つ。理論形成の始点として 19 世紀前半に根差すロースの姿勢を明らかにする。

■私的空間における市民文化への賞賛

19 世紀前半の政治的制約の下、市民は自らの価値観に合

う家具を選び、自らの手で住居を整えた。ロースはその態度を賞賛し、住宅が異なる時代や文化の家具調度で整えられていても決して様式の混在ではなく、当時はただひとつ「家族の様式」⁷として成立していたとする。それは、「全ての家具を結びつける共通の絆」⁸が存在することを意味する。ロースは「部屋はヴァイオリンのようなものだ」⁹と述べ、楽器を弾きこなすように、部屋に住みこなすことを強調した。

■簡素な椅子への志向

M.V.ペーン¹⁰がビーダーマイヤー様式の特徴とした「簡索性」、また大量生産による一般家庭への普及という点から、トーネットの曲木椅子は最もこの時代を具現化する家具と言える¹¹。普段からトーネット製の椅子を愛用¹²したこと、そして自らの手掛けたカフェに配置したこと、トーネットの簡素な椅子を志向するロースを明らかにした。彼は過去からその曲木椅子を見出し採用した訳でなく、幼少期から慣れ親しんだ最も身近な家具としてその伝統を継承していた。(図 1)



図 1 幼少期のロースと
トーネットの曲木椅子
出典:K.マンク
『トーネット曲木家具』p.135

■室内空間における内向きな眼差し

トーマス・マンによる小説『ブッデンブローック家の人々』¹³におけるビーダーマイヤー期の一般家庭の室内描写をもとに、その空間構成を明らかにした。そこでは、簡素で必要最低限の家具が壁に沿うように配置されていた。(図 2)

一方、ビアトリス・コロミーナによるル・コルビュジェとの比較より明らかにされた「内向きな眼差し」というロース特有の空間構成¹⁴と、ロースの弟子ハインリヒ・クルカ(Heinrich Kulka, 1900-1971)が説明する「家具は部屋の隅に置いて、部屋の中央は空けておく」という構成から、19 世紀前半の室内構成との一致を示した。(図 3)

この点からもロースの理論形成において 19 世紀前半が極めて重要な意味を持つことが伺える。



図 2 ビーダーマイヤー期一般家庭の室内
出典:名古屋博物館『ウィーンの歴史と芸術』p.97



図 3 ロース設計、ペラーク邸(Wien, 1909-12)
出典:Heinrich Kulka『ADOLF LOOS』p.77

4. 19 世紀後半に対する言説の段階性

ここでは、19 世紀後半に対する発言の意味合いが段階的に変化していることを検討する。それらの発言は新興市民階級に向けたものであり、ロースが、彼らの文化の動向を的確に捉えていたことを明らかにする。

■イミテーションの台頭への危機感

新興市民は、ビーダーマイヤー期の市民的な趣味嗜好を捨て、高位貴族の表面的な模倣により下層階級との区別を図った¹⁵。ロースによれば、見せることに主眼が置かれた貴族の家具は、構造から素材の質まで全てが洗練されていたが、新興市民がそれを真似る時、見た目の華やかさのみが強調される。その産物こそがイミテーションであり、そして、各階級間の壁が崩れ去った時、それが台頭するのだとロースは述べる¹⁶。壁が崩されたのは巨視的に見れば市民文化が解放された1848年三月革命であり、ロースはイミテーションそのものだけでなく、その台頭の過程にまで意識的であった。

■イミテーションの氾濫への絶望

ロースがその台頭に危機感を感じたイミテーションは、家具と同様、過去や他文化の様式を模したファサードとして都市空間においても行なわれ、その点で、リングシュトラセはそれ自体がイミテーションであった。ロースはそれを「ポチョムキンの都市」と称し、「需要と供給の関係が建築形態を規定していく」¹⁷と述べた。そして、建築家ではなく施主である新興市民の責任を追及し、彼らのことを「詐欺師(ein Hochstapler)」とさえ呼んだ。しかし、新興市民の中には、この行為がモラルに反し、詐欺に等しい行為であると自覚する者はいなかった。経済的にも社会的にも成長を見せ、都市空間において市民文化を活性化させた、彼らのそのような実態にロースは絶望すら感じていた¹⁸。

■イミテーションの克服への期待

ひたすら前進を続けた新興市民は、先に述べた危機管理の欠如という自らの弱点が露呈した時、初めて表層を取り繕うことにより支えられた自分達の文化を省みた。そこで、ロースはこれまでの批判的態度を一変させ、新興市民に対する、新たな認識を明らかにする。高価なものや装飾に金を費やすのではなく、耐久性や実用性を最も価値のあるものとする。この態度はロースが賞賛したイギリス市民への認識と全く同じものである。ロースは、「市民階級としての誇りが目覚め、成金主義は時代遅れになってきている」¹⁹と述べ、1898年の時点で、オーストリアがイギリスに次いでまさに同じ歩みを進め始めていたことを指摘していた。

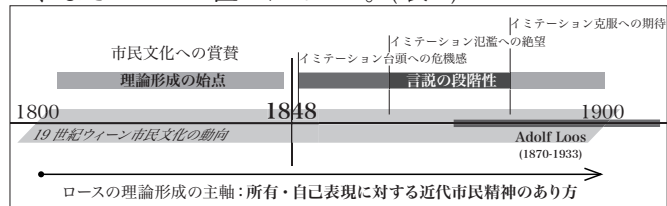
5. アドルフ・ロースの真意

これまでの分析から、19世紀ウィーンにおける社会構造の変化に、ロースが意識的であったことが指摘できる。それを踏まえて、ここではロースの理論形成の軸を追う。

5-1 理論の軸としての近代市民精神

19世紀市民文化は、何をもって他階級との区別を図るかといった、近代市民の所有行為や、それに付随する自己表現のあり方に深く根を下ろしている。ロースが装飾に対し「もはや我々の文化とは有機的なつながりがないのだから、それは、我々の文化を表現するものでもない。今日、産み出される装飾は我々とは関係がないし、人間的なつながりは全くない。」²⁰と言う時、部屋を「家族の様式」に従い住みこなすことに価値を置いた、19世紀前半の市民精神の健全さが伺える。ロースはウィーンの世界構造を理解しただけでなく、それに準じて変化する近代精神のあり

方を見逃すことはなかった。そして、彼の理論形成の軸は、まさにここに置かれていた。(表1)



5-2 ウィーン近代市民精神の限界

ロースの理論と表裏一体であるウィーンの姿は、少し視点を広げるとまた違ったものとなる。ここでは、同じ言語圏で共にビーダーマイヤー文化を育んだドイツ、そして彼が晩年活動したパリに着目する。ウィーン市民は、かつてのヨーロッパの中心権力であるというパリとの共通点を誇りに、ドイツとの区別を図った²¹。しかし、ウィーン市民が封建的な社会構造に従う一方、パリは市民革命による変革を繰り返し、ウィーンの前を進んだ。その中でロースは晩年、ドイツ人と自分を区別する発言を、パリにおいて行った²²。しかしパリにおける彼の活躍は鮮明ではない。この姿は、既に破綻していたパリとの共通性を誇りにドイツを見下すウィーン市民の姿に重なる。ロースは、ウィーンという土壌無しには存在し得なかったが、受動的で革命熱に欠けるウィーン市民の完全とは言えない近代精神が、そのままロースの越え得なかった限界として現れているのである。

結論

以上より、ロースが19世紀前半を理論形成の始点とし、市民文化の動向を的確に捉え19世紀後半に対する発言を段階的に展開したことを見出した。またその理論形成の軸が、所有行為や自己表現という近代市民精神のあり方に置かれていたことを明らかにした。そして視点を広げ、ウィーン市民としてのロースの近代精神の限界を考察した。

謝辞

加藤淳氏をはじめとする早稲田大学中谷研究室アドルフ・ロース翻訳出版ゼミの皆様、更に夏期ウィーン調査にご支援頂いた安藤忠雄文化財団に厚く御礼申し上げます。

1. 浅井麻帆「アドルフ・ロースの装飾批判とビーダーマイヤー再発見」(2009): 一般に装飾批判に関してロースは対立関係にあると見られ、共に世紀末ウィーンに満ちていた見せかけの歴史主義者の批判者である。捉え、その背景にあるビーダーマイヤー期を指摘。伊藤智夫「ウィーンにおける近代集合住居について」(1997)。他著作一部: ウィーン近代建築の展開にビーダーマイヤーの住文化が少なからず影響していると指摘。2. 1922. 1928. 唯一: ムラサキ(1929)を設計。3. ウィーン会議(1814-15)以後の、自由主義・国民主義運動を抑制したヨーロッパの国際秩序。4. ウィーン体制を事実上崩壊に追い込み、各領域に自由化、近代化を導入されたこととなった。革命は1848年にヨーロッパ各地で起こった。5. 1237年のレオポルト大公による都市改造以来、約600年ぶりの組織的な都市計画。皇帝が払い下げた土地を新興市民がそこで買い取り、建設を主導した。7. 89. 「ロンドンにおけるインテリア Die Interieurs In Der Rotunde」(新聞「アイエフ・ツァイェ」フレッシェ Neue Freie Presse) 1898.06.12付)「あらゆる家具、あらゆる日用品が、一つの歴史、家族の歴史を伝えている。住宅は決して完成しない。それは我々とともにそれぞれ自身成長し、そして我々もその中で成長するのだ。おそろいそこにはどんな様式も存在しない。ここで言っているのは、つまりどんな外廊や内廊の様式も、ということだ。けれどもたまたまひとつだけ、住宅の様式を持っている。その住人の様式、家族の様式だ。」10. Max von Boehm, 初期のビーダーマイヤー研究者。11. 浅井氏はこの点も指摘している。12. 小説家フリック・ザンゲンへ宛てたロースの手紙より。13. 「多分、私が普段使用しているトーマットの椅子を手に入れて、居合わせた人々に、我々の形態の発生源を感してはならない、と促しているのを思い出して下さい。このことによって、私は、セセッションから、例外なしに芸術家ではないトーマットの椅子の崇拜者の初歩をおさるることに成功しただけです」13. Thomas Mann(1875-1955)『ブッデンブローock家の人びと』岩波書店、1969。14. ビアトリス・コロミナ「スマチアとしての近代建築: アドルフ・ロースとルビエ」15. 鹿島出版会『1996. 15. 山ノ内克子「ウィーン、ブルジョアの時代から世紀末へ」講談社、1995。16. オーストリア博物館の冬期展覧会 Weihenachtsausstellung Im Österreichischen Museum (週刊誌「Die Zeit」1897.12.18付)「壁は崩れた。王侯が高位の貴族に、高位の貴族が低位の貴族に、低位の貴族が市民に対して自らを解してきた壁は、(中略)莫大な資力の所産である貴族階級の家具は、ものすごく金がかかる。しかし一般大衆がそれだけの金を自由に使える訳がない。そのための素材は浅はかな。王侯の得まじやふり尽くさずとするぞとするような産物ともが台頭した。イミテーションが現れたのだ」17. 「ポチョムキンの都市」(A. ロース著、伊藤智夫訳「装飾・建築・文化論集」所収) 18. 前記「ポチョムキンの都市」。「実際の身がよりも、身かの誇りもとの吹聴するものは詐欺師であり、たとえそれが個人に迷惑をかけたとしても、(前記)「装飾と罪悪」所収) 21. ヘルムウト・プロット「ウィーンの陽気な黙示録」(「ウィーン」所収) 国書刊行会、1986。所収) 22. (第2版序文 Vorwort Zur Zweiteausgabe. (Fins Leere Gesprochen) 所収) ドイツ人が手に入るとき、彼らはもはや彼が考えるように、彼らがドイツにも手に入ることができない。昔者は話すことができず、語す者は書くことができず。そして最後に、ドイツ人はそのどちらでもできなくなるのである。—パリ、1931年6月。アドルフ・ロース

* 早稲田大学創造理工学研究所 修士課程

*Graduate student, School of Creative Science and Engineering, Waseda Univ.

** 早稲田大学創造理工学研究所 准教授・博士(工学)

** Associate Prof. School of Creative Science and Engineering, Waseda Univ., Dr. Eng